

展示会

「北欧からのおくりもの 子どもの本のあゆみ」

関連講演会

「スウェーデンの子どもの本とその魅力」

平成18年11月9日

講師：菱木 晃子（翻訳家）

スウェーデンの子どもの本の魅力とは

皆さんこんにちは。ノルウェーはスカンジナビア半島の左側西側に位置する国で、スウェーデンはそのお隣でやはり南北に細長い国です。人口はノルウェーよりちょっと多くて900万ぐらいいます。東京都の人口より少なく、面積は日本の1.2倍ぐらいいますので、いかに人口密度が低いかということを感じていただけるかなと思います。森と湖の国です。私のことを先ほど館長にご紹介していただいたのですが、最初に翻訳した本が出て今年で18年になります。出版社に持ち込みを始めたのはその2、3年前からになりますので、これまでおよそ20年間スウェーデンの子どもの本を翻訳者として見てきました。78冊訳した本があります。そのうち66冊がスウェーデン、1冊がノルウェー、1冊がデンマーク、あと10冊がオランダ語からの翻訳です。つまり私は主にスウェーデンの本を訳してきたわけですが、飽きずに続けてこられたのは、やはりスウェーデンの子どもの本の魅力があって惹かれていたからだと思います。今日はその魅力とは何かを1時間ちょっとの間にお話しようと思います。

一言で言うとスウェーデンの子どもの本の魅力は、非常にバラエティー豊かだということだと思います。レジュメにも書きましたが、古典から現代の作品まで、それから対象年齢という

ものがありますが、赤ちゃん絵本からヤングアダルトまで、あるいは大人が読んでもいいボーダーレスのものまであります。内容的に見ますと、神話ですとか民話ですとかファンタジーですとか、今のスウェーデンの社会がわかるような現代リアリズムですとか、あるいはノンフィクションのものとか、非常にバラエティーに富んでいるということが言えると思います。翻訳者として見た場合、そういういろんな本があると選択の幅が広がるわけで、選べるという意味で翻訳者としては幸せなことです。まず、具体的にどんなふうにバラエティー豊かかというのを見ていきたいのですが、今回の展示会「北欧からのおくりもの 子どもの本のあゆみ」はミュージアムのほうに年代の古いものから新しいものへと北欧5か国混じって展示をしております。今日の話も、古典から現代までという流れのなかで赤ちゃん絵本からヤングアダルトまで、内容的にいろんなものがあるよということをご紹介していきたいと思っています。レジュメのほうで22、261、23とか数字がありますが、展示資料の番号です。実際展示ケースの中に入っているのもあって持ってこられないものもありますので、後で展示資料室のほうへ行かれて、その番号の本を見ていただけるといいなと思っています。

19世紀の終わりから20世紀の初頭にかけて

まず、時代的なことを追ってきたいのですが、先ほどボルさんもおっしゃっていたように、スウェーデンでも19世紀の終わりから20世紀の初頭にかけては子どもの本の黄金期がやってきた時代です。その時代の作家の作品として、イェンニ・ニューストレムからリンドグレンの前まで、19世紀後半から20世紀前半ぐらいいまでに活躍した有名な作家のものをピ

ックアップしてみました。一番最初にイェンニ・ニューストレムという人がいるのですが、資料番号 22「子ども部屋の本」があります。実はこの絵本がスウェーデンで初めてスウェーデン人が絵も描いてテキストも書いたものです。いわゆるスウェーデン初のオリジナル本といえる絵本です。その絵本は今展示室のほうに飾ってあります。その中の絵はこんな感じです。実際はカラーなのですがこれは白黒で、テキストは下のほうに書いてあって、ナンセンスな韻を踏んでいる詩になっています。

もう 1 人オッティリア・アーデルボリというこの時代に活躍した女性作家がいます。19 世紀の終わりから 20 世紀の初めは美術史的に見るとアールヌーボーの時代でして、絵本をご覧になるとアールヌーボーの影響がすごく現れていることがよくわかります。これは ABC の本です。お花の名前を頭文字にして ABC を表した本です。A はオダマキです。B はスハマソウとかミスミソウとかいいいます。それから C は Champinjon でマッシュルームです。ちょっと飛んで、G はキバナノクリンザクラと言います。この本は右側に詩が書いてありまして、レジュメに訳を書きました。「春がきて、カッコウが鳴き、野原や谷にキバナノクリンザクラの花が咲くと、生きていることが楽しい。北欧は冬が長いので、春になるとお花がぱっと咲いてみんな人生が楽しくなるという気持ちが表れています。

この時代の絵本を二つ紹介したのですが、文章のほうではセルマ・ラーゲルレーヴというスウェーデンではとっても有名な、スウェーデン人初、そして女性で初めてノーベル文学賞を受賞した作家がいます。その人が書いた子どもの本というのが『ニルスのふしぎな旅』です。日本ではアニメにもなったのでとても有名なおはなしです。あと、もう一つ、『リッランとねこ』

という絵本もこの時代のものです。イーヴァル・アロセニウス、この人は男の人なのですが、この人が描いた絵本です。ぱっぱっと描いたように見えます。自分の子どもを膝の上に乗せて描いたという逸話があります。ムーミンの作者のトーヴェ・ヤンソンも子どもの時『リッランとねこ』が大好きだったと、インタビューで読んだことがあります。スウェーデンではいまでも古本屋さんではなくて普通の本屋さんで売っている本で、親子 3 代ぐらいいわたくし親しまれている本です。

それから、この時代に絶対に忘れてはいけないうスウェーデンの国民的絵本作家でありますエルサ・ベスコフという人がいます。このたびの展示会でもベスコフの本はたくさん出してあります。この時代、子どもの本だけが花開いたのではなくて、子どもの文化全体が脚光を浴びた黄金期だったのです。アリス・テグネールという作曲家がいて、子どもの歌を作った人です。その人の歌にベスコフが絵を付けている歌の絵本です。菓子職人さんの歌がありますので実際、どんな歌か聞いていただきたいと思います。歌詞は「ひとりの菓子職人さんが町に住んでいる 菓子職人さんは毎日のお菓子をお焼く 大きいのも焼くし、小さいのも焼く お砂糖をのせて焼くのもある ウィンドウにはクリスマスツリーの飾り物がさがっている それから馬や豚やジンジャークッキーも いい子なら、もらえるよ でも悪い子なら、行ってしまいなさい。そういう歌です。スウェーデン語が韻を踏んでいるのがわかるのですが、1、2 行が韻を踏んで 3、4 行目が韻を踏んでいます。ことば遊びのものはなかなか日本語になりにくいので、訳されることはあまりないのですが、お聞きになったのは CD でした、いまでも歌われている歌です。

1945年 ピippiとムーミンの誕生など

スウェーデンの子ども本が花開いたのが 19 世紀から 20 世紀の初めということでしたが、スウェーデンの児童文学史を語るとき、忘れてはならない 1945 年という年があります。1945 年は第二次世界大戦が終わった年です。スウェーデンは中立国だったので実際、国に爆弾が落ちたり、ドイツ軍が攻めてきたりという直接的な打撃がなかったので、比較的国に余力があったのと、戦争が終わったので明るいムードになって、わあっと子どもの本に力が行ったのかなという気がします。

アストリッド・リンドグレンはここで話しますとそれだけで終わってしまうような気がしますが、かなり多くの本を展示しておりますのでご覧ください。リンドグレンが育ったスモーランドはスウェーデンでは南の東側になるでしょうか。バルト海側で、ストックホルムよりかなり南に下ったところですが、「わたしのスモーランド」というこの本はそこで撮った、彼女とそのゆかりの地の写真集みたいなものです。残念ながらリンドグレンは 2002 年に 94 歳で亡くなってしまったのですが、来年の 2007 年は、彼女が生まれたのが 1907 年ですので生誕 100 周年なのです。もちろん、スウェーデンでもリンドグレンのコンファレンスが開かれる話も聞いておりますし、たぶん日本でもリンドグレンが改めて注目されるのではないのでしょうか。

先ほど 1945 年は大事な年だと申しましたが、もう一つ忘れてはならないことがあります。トーヴェ・ヤンソンのムーミンの最初のシリーズが出たのが 1945 年でした。リンドグレンの『長くつ下のピippi』が初めて出た年と同じです。同じ年に出たということで、スウェーデンだけあるいは北欧だけでなく、世界の児童文学

史を見た場合でも非常に意味のあるマークすべき年になると思います。これが最初のムーミンなのですが、鼻が尖っていて今のムーミンとは顔つきが違います。最初はこんな感じだったというものです。トーヴェ・ヤンソンもそうですが、フィンランドに住んでいる人たちで一部の人はスウェーデン語を母語としています。スウェーデンの子どもの本といった場合、スウェーデンという国で括るより、スウェーデン語という言葉で括ると、少し地図が広がるという現象があります。トーヴェ・ヤンソンはスウェーデン語を母語としています。フィンランド人ですがスウェーデン語でムーミンを書いています。

もう一人フィンランド人ですがスウェーデン語で書いている人として、イルメリン・サンドマン・リリウスという人がいます。トーヴェ・ヤンソンはもう亡くなりましたけれど、彼女のご存命です。イルメリン・サンドマン・リリウスはトラヴァールという架空の町を舞台にしていくつも連作を描いていまして、「ボナデア」は、トラヴァールを舞台にしたお話の最初の本です。私は、リリウスが大好きです。ファンタジーと現実が入り混じった作品を描く人で、すごく派手な事件が起こるわけではないのですが、架空の町に住む人々の日常を淡々と描いていて、非常に心の琴線に触れるようなことをうまく描いている人です。もっと日本で紹介されれば良いなと思っています。

1945 年にもう一つ大事なことがありまして、アストリッド・リンドグレンはスウェーデンでは児童文学の女王とたとえられるのですが、レンナート・ヘルシングは男の人でスウェーデンでは児童文学の王様といわれる人です。彼もご存命です。彼はナンセンスなことば遊びを得意としていまして、曲がついていて、今でも親

しまれてよく歌われています。「キュウリ氏が踊る」の歌詞を書いておりますので、どんな曲がついているかを聞いてみてください。

「キュウリ氏が踊るよ ワルツとマズルカの両方を キュウリ氏は緑色 お兄さんも緑色2人とも靴下をはいている だけど靴ははいていない。ギョルカ(キュウリ)とマズルカ(踊りの種類)が韻を踏んでいて、ブロール(兄弟)、ストロンポール(靴下)、スコール(靴)と韻を踏んでいます。日本語に直訳すると面白くないので、こういう絵本はなかなか日本語になりません。でもスウェーデンの子どもが聞くと、だじやれ的なものなのでおもしろおかしい詩ということになります。

114~118 まで展示室に飾ってありますマリヤ・グリーペという作家がいます。この人は日常のものも書きますし、ファンタジックなものも書いています。最近、『夜のパパ』が復刊されたので、もっと日本で読まれたらいいなと思っております。次にこのかわいいおばけの絵本ですが、インゲル&ラッセ、インゲルという奥さんと、ラッセというご主人の、サンドベルイ夫妻がずっと描いているシリーズの『おばけのラーバン』です。コラージュを使っています、これはクリスマスのお話なので、ツリーが飾ってあります。いろんなシリーズが出ております。同じような時代で125、126のグニツラ・ベリイストロムという人の絵本も人気がありました。ノルウェーでもそうだったのですけれど、70年代ぐらいになると時代を受けて社会リアリズムの本も出てきました。128のトーマス・ベリイマンの『わたし、耳がきこえないの』はノンフィクションでいま展示室に飾ってあります。ハンディキャップの子どもたちを写真で伝えるシリーズが出ています。

1980年代以降

19世紀から20世紀にかけて、また1945年代以降、スウェーデンの子どもの本が黄金時代でありました。さらに1980年代ごろになると、新しい作家、新しい絵描きさんが出てきて、スウェーデンの子どもの本がまた活気づいてきます。ちょうどこの人たちは年代的に、リンドグレンの本をリアルタイムで読んで育った人たちが大人になって子どもの本を描き始めた、ということが言えると思います。

これはレーナ・アンデションの「マーヤのアルファベット」という本で、ABCの本です。さつき世紀末のABCの本をご覧いただいたのですが、これは日本語に翻訳できないので、レーナ・アンデションさんの許可を取ってABCを取ってお花や植物の本として出しましたので、日本語のタイトルはABCの本ではなく『マーヤの植物だより』という植物の本になっています。

1980年代になりますと男性の作家でヤングアダルトものに腰を据えて描いている作家が目立ってくるようになりました。その1人が147、148のペーテル・ポール、続いて、マッツ・ヴォール、次のウルフ・スタルクあたりがヤングアダルトものを書いている人です。先ほど紹介したマッツ・ヴォールの『マイがいた夏』は展示室にはハードカバーの本を展示してしまっていて、こちらはその後に出たポケット版、ソフトカバーの表紙です。

右側は日本語版です。同じ本でも表紙が替わるとずいぶん雰囲気が変わると思います。

マッツ・ヴォールはもう1冊『冬の入江』という現代の若者の話も訳しているのですが、昔からマッツ・ヴォールは好きで、特に『マイがいた夏』が一番好きな作品だったので訳せてよかったなと思っています。

次のウルフ・スタルクの作品は展示番号 192 から 197 にあげています。先ほど、66 冊スウェーデンの本を訳していると言ったのですが、そのうち 20 冊がウルフ・スタルクですので、ここでウルフ・スタルクの話をしたいと思えます。『うそつきの天才』はショートストーリーズとして日本では 4 冊出ているのですが、スウェーデンでは 1 冊の本で短編集として中に絵はついてなくて出ています。映画のタイトルをもじって「マイ・ライフ・アズ・ウルフ」のタイトルでスウェーデンでは出ています。わかりにくいかもしれませんが、(表紙の)向かって左側の人が若いときのウルフ・スタルクです。15、6 歳くらいのウルフさんです。隣がたぶん、ウルフさんのお話に出てくるお友だちだと思います。ウルフ・スタルクさんは自分の子ども時代を基にいろいろエピソードを書いている人です。最近ファンタジーとかメルヘンとか新しい分野も開拓しているようです。彼はマルチな才能のある人で、映画の脚本なんかも書いているのですが、これは彼が自分で絵も描いています。まだ日本では出ていないのですが、ウルフ・スタルクさんは文章も絵も自分で書ける人で、なかなか絵もお上手じゃないかと思えます。これは不条理もので、ウルフさんの子ども時代を基にした現実の話とは違ってかなり変わった作風の話です。ウルフファンとしては、それを読んでがっかりするのか、あるいは新しい世界が広がって面白いと感じるのか、これから翻訳をするのですが、反響が怖いかなというところです。

先ほどペーテル・ポールとかマッツ・ヴォールとかウルフ・スタルクとか男の人で腰を据えてヤングアダルトものを書いていると話したのですが、もちろん、女の人でも一生懸命書いている人がいて、今私が一番注目しているのはアニカ・トールという女性の作家です。左が原

書で右が日本語版です。アニカ・トールさんはスウェーデン人なのですが、血筋的にはユダヤ人で、ユダヤ人の家庭で育った人です。スウェーデンは中立国だったのですが、オーストリアとドイツからスウェーデンの里親に引き取られてウィーンから逃げてきた姉妹のことを書いた第二次世界大戦の話なのです。ユダヤ人ものというアウシュビッツなどの収容所の恐ろしい場面を想像されるかもしれませんが、この話のいいところは、収容所の具体的な殺戮場面は出てきません。ただ、お父さんとお母さんはウィーンに残っていてそのウィーンからの手紙が次はチェコの収容所からとなり、そして途絶えてしまう。あとは新聞とか人の噂などそういうもので、実際ウィーンやドイツで何が起きているのが客観的に語られていくのです。主に描かれるのは女の子たちが異文化のなかで育っていく姿で、戦争の場面だけでなく子どもの成長が描かれているのがすごくいいなと思います。これは 4 部作なのですがまだ 1 冊しか訳していません。あと、アニカ・トールさんは現代のものも書いていますし、映画の脚本も書いています。スウェーデンの方は子どもの本も大人の本も書けば、脚本も書くといった多才な方が多いなと思います。

次はアンナ・ヘグルンドさんの絵本です。アンナ・ヘグルンドさんはウルフ・スタルクと組んで『おじいちゃんの口笛』などたくさん本を手がけているのですが、彼女自身も自分で文章も書き、絵本作家としても活躍している人です。これは「夜の旅」という絵本ですが、日本では出ていません。アンナ・ヘグルンドさんの絵は独特なので、スウェーデン人の研究者に話を訊くと子どもの中にも、アンナ・ヘグルンドの絵をすごく好きな子と、怖いという子に分かれるという話を聞いたことがあります。ちょうど 2

年前になるのですがウルフ・スタルクさんとアンナ・ヘグルンドさんが一緒に来日されて東京でも2回ほど講演会がありました。そのときいらしてくださった方が見回してみると、今日も何人がいらっしやるようです。次のレジュメでいくとスヴェン・ノードクヴィストの作品があがっているのですが、これは展示室のほうで見ていただきたいと思います。ペットソンというおじいさんとフィンダスという猫のキャラクターがスウェーデンの子どもに大変人気のある絵本です。

次はアンナ-クララ・ティードホルムの作品を見てもらいます。これは2、3歳ぐらいの小さい子から楽しめる絵本です。日本語版では『たたいてみよう!』というタイトルで出ています。ちょっと中を開いてみます。右側に青いドアがあって、めくると青いドアがアップになって、さらにめくると青いドアの中には男の子たちがいて、さらにその向こうには赤いドアが見えていて、赤いドアをトントンたたくと兎が人参を食べていて、さらに向こうに緑のドアがあって、緑のドアをたたくと猿が遊んでいて、その向こうに黄色いドアがあって、さらに黄色いドアをたたくと小さなおじさんがいて、花に水をやっていて、猫に餌をやっている。このあたりで、真面目な大人には「小さなおじさんというのがよくわからない」と言われてしまいます。子どもは気にしないで、「小さいおじさんだな」と自然に受け止めてくれます。さらに向こうに白いドアがありまして、白いドアをトントンたたきますと、熊が寝る仕度をして歯を磨いていて「おやすみなさい」。子どもには繰り返すと単純な絵が喜ばれるのではないかと思います。去年バリアフリーの展示会るとき健常者も読めてハンディキャップの人も読める本としてこの本が選ばれていました。

スウェーデンの本はバラエティー豊かというのは、非常に真面目な本もあれば、この本のよう、ナンセンスで不条理で訳のわからない本もあるということです。バルプロ・リンドグレンの作品です。リンドグレンというとアストリッド・リンドグレンと同じ人ですが言われるのですが、別の人です。わりと若い頃に描いた作品で、「ロランガ、マサリン、ダルタニアン」という親子3代の話です。おじいさんとお父さんと息子の3人が暮らしているという設定なのですが、非常にナンセンスで私はこの本が大好きですので、ある出版社にあらすじを書いて売り込みに行ったのですが、実現はしませんでした。こんなあらすじをよく書けましたねと褒められて終わりました。それぐらい訳のわからない本です。虎がプールに入って泳いでいると虎の耳がふやけてとれてしまう。これを翻訳していると私が馬鹿みたいに思われるのですが、本当にこの本が好きなのです。

次はウルフ・ニルソンとエヴァ・エリクソンの新しい絵本が1冊あります。ウルフ・ニルソンもたくさん児童文学や絵本を書いている人です。エヴァ・エリクソンは日本でも人気の絵本作家で、挿絵もたくさん描いています。『おじいちゃんがおばけになったわけ』を後ろの机に置いてもらっています。これが彼女の最新の絵本です。「すべての死んだ小さな動物」、直訳するとこんなタイトルです。絵はとて素晴らしいのですが、話がどうかというところで出版されるかどうかわかりません。絵本なので絵がよくないとそこでだめなのですけれど、いくら絵がよくても話がよくないと出版にこぎつけることは出来ません。絵と話の両方よいものを見つけるのは翻訳者も大変ですけれども、出版社の人も大変じゃないかなと思います。

ヘニング・マンケルという人の本は持って来

てなかったのですが、実はこの人は大人の推理小説作家として非常に有名な人です。日本でも柳沢由実子さんの訳の文庫本で出ていますが、子どもの本も書いています。私がヘニング・マンケルの本を翻訳したとスウェーデン人に言うと、どの推理小説かと訊かれます。子どもの本だと言うと子どもの本も書くのかと訊かれるくらいスウェーデンでは推理小説作家として有名です。

次の224、225、295から298はオロフ&レーナ・ランドストレムのご夫婦の本が出ています。その次の226がヨックム・ノードストレムです。まだ日本では出ていません。今私が訳している絵本です。ヨックムさんは10月に大阪にいらしていました。なぜかというとその奥さんがカーリン・マンマ・アンダーソンといって現代アートの有名な絵描きさんなのです。彼自身も現代アートで活躍しています。今この本を訳しているので日本語版にするにあたってレイアウトを少し変えたいと思ったので大阪まで会いに行きました。会ったら、気さくでそのうえハンサムな人でした。このシリーズは5冊あるのですが、5冊まとめてやりましょうということで来年出る予定です。荒井良二さんもこの絵本が大好きだそうです。何か近いものがありますよね。

ピーア・リンデンバウムというこの人も、80年代ぐらいから活躍している絵描きさんです。今スクリーンにスウェーデン語版が映っていて、展示室にもスウェーデン語版が出ているのです。ここでもわかると思いますが、お母さんとエルサ・マリーという女の子となぜか、小さいお父さんがいっぱいいます。数えていただくとわかるのですが、ここでは7人いて、そういう家族構成です。娘とお母さんと7人の小さなお父さんが一緒にお風呂に入っている家族団らんの場合

面です。スウェーデン語版はこういう風に出ているのですが、英語版になったとき、これが教育上よくないというモラルの問題があったらしく、ピーアさんは絵を描きかえなさいと言われて、リビングでジュースを飲んでいるシーンに変わりました。だいたい私を含め周りの人は「やっぱりお風呂よね」といいます。日本人から見るとアメリカもヨーロッパも十把一絡で見て文化を同じように捕らえがちですが、どちらかというとアメリカのほうが保守的で北欧のほうが開けているように感じます。意外と日本は北欧に近い部分もあるのかなということがよくわかります。

特別展示コーナー

続いてレジュメの228はユッヤ&トーマス・ヴィースランデルの絵本なのですが、これは展示室に飾ってあります。牛の楽しい絵本です。今回展示室の四隅にテーマごとに特別展示コーナーを設けました。トロール、クリスマス、スウェーデンの四季、民話、神話、ABCの本、数の本、テーマごとに分けて展示しているところがあるので是非ご覧になっていただきたいと思います。

そこには246のカタリーナ・クルースヴァルという人の数字の本が展示してあります。それで今日は同じ作者のお花の本を持って来ました。特別コーナーは時代を追っているわけではなくテーマごとなので古い本と新しい本が混じっています。

トロールのところで271のヨン・パウエルという人の本が1冊飾ってあります。19世紀末から20世紀初めの人ですが、スウェーデン人がトロールと言うとこの人の絵を想像するくらいトロールの絵で有名な人の本が飾ってあるので、是非ご覧ください。ポスターも飾ってあります。

もう一つ、民話のコーナーに284、285、286と3冊私の古い本が飾ってありますが、グンナル・オーロフ・ヒュルテーン-カヴァリウスとジョージ・スティーヴンズという男の人2人でスウェーデンの民話を集めました。ドイツのグリム兄弟も男2人、ノルウェーも男2人で民話を集めました。この時代1800年代の中ごろヨーロッパにナショナリズムの風が吹いてみんなが民話を集めた。これは偶然の一致ではないと思います。スウェーデンでこの2人が民話を集めたということが児童文学の発展に貢献しまして、2人の名前は日本では知られていないけれど、スウェーデンでは児童文学だけではなく文学の面でも非常に大事な人たちです。

展示されていない作家の作品

展示されていない作家の作品があります。わりと新しい本を持ってきました。パニツラ・スタルフェルトの「毛の本」、これは体のいろんな部分の毛が描いてあります。シリーズでいろんな本が出ています。

新しい絵本作家で、ロッタ・ゲッフェンブラードがいます。実はこの『アストンの石』は私の78冊目の作品で、昨日届いたばかりの本です。もともと彼女はアニメーションの人でご主人と2人でアニメの製作をストックホルムでやっております。この夏8月に広島でアニメ祭があったときに東京に立ち寄ってくれたので会うことが出来ました。とても気さくでいい人でした。これはアストンという犬です。お母さんはいつもギターを担いだミュージシャンのようです。冬になって帰宅途中で石が寒くてかわいそうなので持って帰ります。ベッドに寝かせます。ここの場面でおかしいのは、ベッドで寝ころがっているのがお母さんで、編み物をしているのがお父さんです。いわゆる、ジェンダーという

が役割を固定してなくていいなという気がします。やっぱり右のページでもギターを弾いているのがお母さんで編み物している方がお父さん。アストンは毎日のように石を持って帰ってきて家中石だらけになっていきます。冬中、石を集めます。そして暖かくなって、石をお母さんのギターケースに入れて海に行きます。お母さんはギターを弾いています。アストンとお父さんは石を外に出して自由にさせてあげます。私が好きなのは、お父さんが石を捨てなさいというのではなく、自分で考えて石の仲間がたくさんいるところに帰すことを決意させるところです。最後に石を捨て終わったのですけれど、周りが石ばかりでかわいそうな木の枝を1本拾って来たというところで終わります。作家の人に聞いたのですが、息子さんが実際石を集めていて、こういうことがあったので、それを基にしたと言っていました。これが絵本作家としては彼女のデビュー作です。勿論、アニメ作家としてはキャリアのある方です。

最近、また新しい絵描きさんが出てきて追いついていくのが大変ですが、これは『ちいさなふゆのほん』です。絵がクリスティーナ・ディーグマンで、文章がヨエル・クリスティーナ・ネースルンドです。これも最近日本語版が出ました。何かお話が激しく展開するのではなく、冬の楽しさ、厳しさ、雪、氷を詩のように淡々と語っているものなので、たぶん書評には載りにくい本だとは思いますが、子どもたちにとって、たまには淡々とした絵本もいいじゃないかなと思って翻訳しました。雪だるまも作れるし、猫、女の人、洋ナシも作れます。ノルウェーもそうですが、スウェーデンは冬が長くて寒さも厳しいのです。その分、冬をいかに楽しく過ごすかをよく知っています。特に子どもたちはすごく空想力に富んでいて、楽しく過ごす名人だ

と思います。これも翻訳しておかしかったのは、豚とキツネと一緒に歩いているのです。豚は氷の上を歩いて滑らないのかしらとか、いろいろ素朴な疑問はあったのですが、とにかく豚はキツネに誘われて歩いています。

同じコンビでもう1冊「りんごの本」が出ています。科学絵本でもなく、かといって純粋なフィクションでもなく、その間ぐらいの本です。作者のネースlundさんはりんごの研究者としても知られていて、ジャーナリストとして活躍したこともあります。家庭科の先生もやったことがあるしお料理の本も出しているという、いろんなことをやっている人です。たぶん2人のコンビの本はこれからもスウェーデンで出てくると思います。

読み物もいろいろありまして、これは「シャシキと母さん」という本です。モッサン(Morsan)というのはスウェーデン語で母ちゃんとかカカアとか、いわゆる俗語に近いことばです。でも、子どもの本では最近モッサンという言い方はわりとよく出てきます。「シャシキと母さん」では、お父さんはギリシャ人でギリシャに帰っています。お母さんはシングルマザーで、ロック歌手です。かなり個性的なお母さんに育てられているシャシキという男の子の話です。これはシリーズで出ています。映画にもなったのですが、その映画の脚本を書いたのはウルフ・スタルクでした。スウェーデンの子どもの本は、リンドグリーンもそうですが、映画になったりテレビドラマになったりすることが多いです。最後にお見せするのは「エヴァとアダム」のシリーズです。このシリーズはスウェーデンでは売れていて、いわゆるエンターテインメントの本です。スウェーデンの出版社の人は、売れているので訳したら、と勧めてくれるのですが、あまりに子どもたちの日常をくり

かえし描いていて、日本の子どもにはスウェーデンの学校生活のわかりにくい部分も多く含まれているので、日本人には面白くないのではないかと私は思っています。

訳者として1冊の本に感じる魅力とは

こんなふうに駆け足でスウェーデンの子どもの本をみてきたのですが、スウェーデンの子どもの本の魅力はバラエティー豊かということがなんとなくお分かりいただけたと思います。訳者として、その魅力は何かということになるのですが、簡単に言えばその本の1冊1冊を自分で訳したいか訳したくないか、ということに尽きると思います。魅力を感じる判断基準は、作品として、完成度が高いかどうかということが第一条件となります。私は、日本にはないオリジナルティがあるということを選ぶ一つの判断基準としています。平たく言えば日本の作家でも書けるようなものを、わざわざ翻訳して出す必要はないわけで、日本人には書けないようなものを翻訳することに価値があると思っています。

かといってあまりにもスウェーデン的過ぎるというものは日本の読者がついてこれないので、オリジナルティがありつつも、その中に普遍的なテーマがないと日本の読者は楽しく読めないのではないかと考えています。普遍性を突き詰めていくと、人の気持ちになると思うのです。たとえば、子どもの本で言えば親に怒られて悔しいとか、友だちとけんかして悲しいとか、先生に褒められてうれしい、初恋で女の子に会ってドキドキするとか、そういう人の気持ちというのは時代と国が違ってもたぶん変わらないものだと信じています。私たちが夏目漱石や、源氏物語を読んで何か感動するものがあるということは、要は人の気持ちは100年経とうが

200年経とうが、スウェーデンだろうが、日本だろうが変わらない。共通するものがそこにあるのだと思います。ですから翻訳する意味もそこにあるのではないかと。そして、本が描かれている時代背景や社会的バックグラウンドというものに、スウェーデンの子どもの本のオリジナリティを見つけることができると思います。

子どもの本なので子どもの気持ちがいかに書けていることは絶対なければいけないことだと思っていますが、子どもの本だから子どもだけしっかり描けていけばいいかということではなくて、周りの大人もしっかり描けていることも非常に大切だと思います。周りの大人が美化されていて、非常に道徳的で完璧な大人ばかりだと、子どもはそんなの嘘だと、すぐ見抜くと思うのですね。ですから、人間の弱さ、醜さ、強さ、優しさといった、大人が持っている、ありのままの姿がきちんと描けてこそ、児童文学としても成り立つと思います。スウェーデンの社会に「子どもの最善」という言葉があります。その子にとって、一番何がいいかを考えましようという考え方があって、児童福祉や学校教育のあり方などいろんなところで、その言葉が生きていると思います。

スウェーデンの子ども本を20年見てきて、子どもを1人の人間として尊重しようという姿勢が表れているのではないかと感じる事が多々あります。子どもを1人の人間として尊重して描こうとしているのは、リンドグレンもそうですし、ベスコフあたりから脈々と流れてきている伝統だと思うのです。子どもの目線を大切にすることは、子どもに迎合することとは全然違うことで、子どもの目線を大切にしながら、子どもに媚びずに、本当に質のいい、人間のありのままの姿を描くことが大切にされています。その本が、子どもでも、大

人でも、面白いと感じられるのは、子どもに媚びていないからだといえると思います。子どもも大人も面白いと思う本は、たとえば、1人の子が10歳の時に読んで何か感じた。そして、20歳になって同じ本を読んだ時、あるいはもっと年をとって読んだとき、違うことを感じるかもしれないし、より深く理解出来るかもしれません。1人の人が1冊の本を読んだとき読む年齢によって感じ方が深まるというのは、その本の深みだと感じています。今、78冊翻訳していますが、これから、天職である翻訳を続けていく上で奥行きのある本を訳していきたいなと思います。そのような、子どもも大人も楽しめる質の高い本をこれからも訳していきたいと思っています。

質疑応答

参加者： 子どもの本の研究所がスウェーデン、ノルウェー、フィンランドにあると展示室の年表に載っているのですが、財政基盤、政府からの援助があるのかどうかをお伺いしたい。

ボル氏： 私どものノルウェーの研究所は100パーセント政府より支援を受けております。実はノルウェーの文化教育省とは非常に良好な関係を持っておりまして、こちらは関係が出来てから25年ほどになります。当初は予算も少なかったわけですが、年々予算も増額していただきまして、このような形で財政基盤を政府に頼っているということで、もちろんほかにも子どもたちのためのプロジェクトを行いたい場合は、さらに追加予算の要請も出来るようになっております。このような形で財政基盤に関しては、国のサポートという

ことで現在はこの状態に満足しているわけですが、5年前の状況は今より難しかったです。それから追加ですが図書館の本は出版社から寄贈を受けております。大変ありがたいことだと思っています。

参加者： ノルウェーの子どもの読解力が非常に低かったという大変意外なお話を伺ったのですが、それに関連して、その結果、先生の研究所では子どものリテラシーを向上させるような、そういう活動を、新たなにプロジェクトを始めるとか変化があったでしょうか。

ボル氏： 確かにおっしゃるとおり学力検査の点数が低かったということで私どもも非常に驚いていますが、それが現実でありました。いくつかの手法を取りまして、読解力を向上させたいというふうに考えております。そして、学校にも問題がありますし、読解力が驚くくらい低いという結果が出たということは残念に思っております。1999年からプロジェクトをスタートさせておりまして、これは特に教師の方、あるいは教師になりたいと考えている学生の方に新しい文献、出版物についての情報を提供する目的でプロジェクトを開始しました。なぜかと申しますと、そうした新しい本が今日子どもが抱えている問題をよりよく表していると考えたからです。

付け加えますと、通常の毎年の予算のほかに、このプロジェクトのためだけに別個予算をいただいております。私ども 1999 年からこのプロジェクト

に特化したパートタイムの職員を雇いまして、その人物がノルウェーの各地を回りまして講演活動などを行ってまして、各地の教師に対して、どのようにしたら子どもたちに読む楽しさを教えられるのか、そうしたヒントを提供しております。つまり、楽しいから読むのであって、役に立つからとか、脳の体操になるから読むのではなくて、本当にその喜びを伝えたいと願っております。

参加者： お2人に質問です。ノルウェーとスウェーデンは隣り合った国で、歴史的に問題があったと思うのですが今は両方の国は感情的に思っているのでしょうか。

ボル氏： この二つの国はそのような敵対的な関係は全くございません。むしろ、極めて良好な関係をもっております。スウェーデンのほうはストックホルムに私どものノルウェー児童書研究所と同様の施設でスウェーデン児童図書研究所というところがございまして、二つの機関は大変よい関係を持っております。

菱木氏： 私はスウェーデン人ではないので客観的に見た立場からしか言えないのですがすけれど、北欧5か国は文化交流が盛んで、子どもの本の会議を5か国一緒にやったり、いろんな分野で何かをしようということがあります。父は法律家だったのですが北欧5か国法律家会議がありました。ブックフェアのイベントを一緒にやったり、またフィンランド語以外は言葉も似ていますので会

議に行っても通訳者を介さずコミュニケーションが取れますので、今はすごく友好的な関係にあるのではないかと思います。

参加者： お2人に質問です。ノルウェーでもスウェーデンでも個性的な作品が生まれるのはどうしてかなと思うのですが、何かそういう土壌というのを肌でお感じになることがおありでしょうか。

菱木氏： 北欧には北欧神話がありますね。それは独特だと思います。曜日の読み方もしかりで、北欧神話がベースにあるのです。それが土壌といえば土壌だと思います。読み物のほうで言えば女性の社会進出が進んでいて離婚も多いですし、同性同士で結婚できるとか、すごく社会的に進んでいるといいますが、日本から見ると変わっているといますか、そういう部分が子どもの本にも影響しているように思います。子どもが早い段階で自立し、アイデンティティを探すことが必要に迫られてくるので、子どもの本に影響して、オリジナリティあふれる本があるのかなという気がします。

ボル氏： 私の方から付け加えることはあまりないように思います。ただ1点申し上げるとすれば、イラストの面があるかもしれませんが。聞くところによりますとスウェーデンの絵本は出版社によれば世界的にもよく売れるものだそうです。それで、片やノルウェーのほうになりますと、海外での販売となりますとあまり芳しくないときがあります。ノルウェーの絵本はあまりにも実験的

すぎる、あるいは精神的すぎるといった面があるのではないかと思います。先ほどどうしてユニークな作品が出るのかという質問がありましたが、それに関して具体的に説明することは難しいと思います。

参加者： ノルウェーの子どもの本といいますがと真っ先に思い浮かべるのは、『小さい牛追い』なのですが、それが先ほどなかったのですが、現在それは読まれているのでしょうか。

ボル氏： お尋ねの本なのですが、非常に古い物語ということで、戦前のまだ、ノルウェーが他国の支配下にあったころの本です。現在はより心踊る本も多数出ています。ただ、大変有名な本ですし、読まれてはいるのですが、センセーショナルな面ではそれほど取り上げられていないのかもしれませんが。